

Title	本叢書について
Sub Title	新刊のアメリカ入門経済学叢書 (The economics handbook series) より On this series From The economic handbook series
Author	
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1952
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.45, No.3 (1952. 3) ,p.198(56)- 200(58)
JaLC DOI	10.14991/001.19520301-0056
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19520301-0056

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

伯や聖職者から成り、五月の陽光をうけてその衣裳は、うつくしい *matric* をなしていたとおもわれる。

討議には *nobles* たちだけが加わり、この人たちしか意見をのべるのがゆるされなかつた。ただ形式上は、従えてきたワサルやアントルスチオネスの意見を豫め確め、これを代議するということになつてた。しかしカール個人としては、群衆の中に入り、一人一人したしく質問し、若者たちに冗談をどばし不平をきいたり、はげましたりした。カールが人気をました理由の一つはたしかにここにもあつたとおもわれる。

まさしくカールは、君主であるとともに人民のセニョールであるという意識が、その政治の上で民衆に普及したし、行政的にもこのような階級構成と政體の有機的發現としての政策が、ワサル關係の統制強化や私的ワサル制度を極度に活用した軍制や行政 (*missi*) の獨自な關係をうみだした事が確認される。聖界の統治についてもまたその例外でなかつたことは聖職者たちや宗教會議に關する諸勅令によつて確認しうるところである。

(一九四九年、十月脱稿、一九五一年、十一月加筆)
Le grand Générateur historique, 上原專祿教授の御教示に深謝する。

書評

新刊のアメリカ入門經濟學叢書
(THE ECONOMICS HANDBOOK SERIES) より

本叢書について

經濟學という學問の場合、新しい思想の創造に注がれるエネルギーと、それを傳播するために費されるエネルギーとの均衡が、ことのほか大切であるように思われる。如何に優れた思想であつても、狭く象牙の塔にのみ局限されて市井人の間をゆたかに灌漑することがないならば、それは所詮不毛であり不生産的であり本來の機能を果さぬものと言わなければならぬであらう。最近の經濟學に於ける高度の分化と分析技術の精緻な進展とは、ややもすれば經濟學者をますます各個の専門的な研究にのみ誘ひ、自己のアイデアを普及せしめる志向を蒸發させてゆくとともに、他方市井人教化のあまりにも大きな部分を安易に無資格な教科書書きにのみ委ねてゆく趨勢を生み出しているけれども、この學問の本來の生命に立戻つて考えるならば、このような事態の改善こそ今日の學界に要求されている最も大きな課題の一つであると言ふことが出来るのである。

る。

入門經濟學叢書 (The Economics Handbook Series)

の名の下に公刊される本叢書は、アメリカ合衆國に於いて、何よりもかかる弊害の克服を目指して誕生したものである。編集者セイモア・ハリス教授の言葉にもあるように、本叢書に於いては、著者の第一の任務は「學問に重要な新奇典をなすということよりもむしろ學者としての彼の業績が教室の中だけではなく外部の世界にも及ぶかぎり廣汎に擴つてゆくような仕方であり、自己のテーマを書くこと」におかれている。換言するならば、アメリカ經濟學界第一流の權威自らがそれぞれ自家藥籠中のものとなつてゐる經濟問題を把えて、そのエッセンスを誰にでも分るような形で提供しようといふのである。收めるところは約二十五冊、その内容としては、既に公けにされたフーパー「經濟活動力の配置」、ハンセン「貨幣理論と財政政策」、マイジイ「社會主義」などの他、これからの刊行を豫定されているものの中には、一般經濟理論ではサムエルソンの「經濟學入門」、チェンバリンの「價值および分配の理論」、レオンティエフの「數理經濟學」、メッツラーの「動學的經濟學初歩」、マハループの「經濟學の範圍・概念および諸方法」、ハバラーの「景氣循環論」などが擧を並べ、應用經濟學に於いてはケリスの「國際貿易論」、トリフアンの「中央銀行論」、スリクターおよびダンロップの「勞働經濟學」、ジョン・カッセルズの「農業經濟學」、メイソンの「産業組織論」、ハイカー、ヒルおよびカニンガムの

本叢書について

「交通經濟學」など、更に經濟史の部門ではハッチンスが「アメリカ經濟史」を、ロストフが「ヨーロッパ經濟史」を、という周到さである。そのほか編集者ハリス自身が「社會保障の經濟學」を書き、またアブラム・バアグソンがその得意とする「ソヴェト經濟學」を分擔するなどということも附け加えられておいてよいであらう。ただ本來のスケジュールのうちシムムペーターにその擔當を委ねられていた「貨幣論」と「銀行論」とがこの碩學の突然の死によつてもはやわれわれの手にし得る機會を永久に失つたであらうことはかえすがえすも残念なことである。

本叢書に收められる書物は何れも二五〇頁から四〇〇頁位の手頃な長さで書かれ、一年に數冊ずつ約四、五ヶ年に亘つて刊行される豫定になつてゐる。われわれは以下與えられた紙面を利用して、本叢書の中今回公けにされた三冊の新聞書の書評を行うことにした——タイトの「資本主義」、ラーナーの「雇傭の經濟學」、シェリングの「國民所得解析」がすなわちそれである。これらの書評に立入るに先立つて、以上の短い紹介の言葉が、本叢書の意義を多少とも明らかにし得たならば幸いである。(福岡記)

参考までに本叢書所収の各巻の原書名を左に掲げておく。
その中*印のもののみが既刊である。

General Economics
Paul A. Samuelson, A Primer of Economics.

五七 (一九九)

Edward E. Chamberlin, *The Theory of Value and Distribution.*

*Abba P. Lerner, *Economics of Employment.*

Wassily W. Leontief, *Mathematical Economics.*

Lloyd Metzler, *Elements of Dynamic Economics.*

*Thomas C. Schelling, *National Income Behavior.*

Fritz Machlup, *The Scope, Concept and Methods of Economics.*

Money and Related Fields

Joseph A. Schumpeter, *Money.*

*Alvin H. Hansen, *Banking.*

John H. Williams, *Monetary Theory and Fiscal Policy.*

Gottfried Haberler, *Trade Cycles.*

Howard S. Ellis, *International Trade.*

Robert Triffin, *Central Banking.*

Other Applied Fields

Slichter & Dunlop, *Labor Economics.*

John Cassels, *Economics and Agriculture.*

Edward S. Mason, *Industrial Organization.*

Seymour E. Harris, *Economics of Social Security.*

Baker, Hill & Cunningham, *Economics of Transportation.*

*Edgar M. Hoover, *The Location of Economic Activity.*

Economic Organization and Government

*David McG. Wright, *Capitalism.*

Paul M. Sweezy, *Socialism.*

Abram Bergson, *Soviet Economics.*

Lincoln Gordon, *Government and Business.*

John G.B. Hutchins, *Economic History.*

Walt W. Rostow, *American Economic History.*

Walt W. Rostow, *European Economic History.*

ライト『資本主義』

David McCord Wright, *Capitalism, 1951, pp. xvii+246.*

千種義人

イトの語るところによれば、シュムペーターの最も魅力的な性格の一つは異説に對する彼の態度であつたと。シュムペーターは資本主義の存続を不可能と考え、社會主義社會への必然性を主張したのであるが、ハーバード大學で彼の講義を受けつゝも

ライトは、この點について、シュムペーターに同意し得なかつた。ライトの見たところでは、シュムペーターは一種の觀念論的運命論者であつて、資本主義組織の技術的可能性を問題にしなかつたのである。ライトは、これに反して、幾分樂觀主義者であつて、むしろ資本主義を如何にすれば存続せしめ得るかについて構想を練つたのである。しかしシュムペーターは自己の意見を弟子に押しつけるような態度をとらなかつた。彼はただ自己を理解してくれることを求めた。この意味でシュムペーターはライトにとつて師であり、批判者であり、友であつたのである。

本書は資本主義に關する概論である。ここで取扱われている主な問題は、資本主義のイデオロギーは何か、資本主義は經濟的生長に適しているか、廣く社會問題とは何か、生長の條件は何か、資本主義の缺陷は何か、社會保障の發達は生長と自由とにどのような影響を與えるか等である。著者は、先ず資本主義の缺陷を認める。そして自由放任を以つては、資本主義を乗切ることができないと考える。しかし計畫化ないしは強制によつて、自由と生長を奪つてはならない。自由と生長とを共存せしめつつ、しかも資本主義の缺陷を除くにはどうすればよか

ライト『資本主義』

らうか。如何なる方策も完全ではないかも知れないが、何らかの方策が可能なのではなからうか。彼はその方策を技術的に考察しようとするのである。

本書は、第一部社會問題、第二部資本主義の諸問題から成つており、第一部では社會問題とその解決の方法が示され、第二部では景氣循環、獨占、資本主義の安定化及びその將來が論じられている。

第一部、第一章、「政府と社會問題」において、先ず共產主義者の教義「國家の衰退」が吟味される。レーニン・マルクス主義者によれば、私有財産制度が廢止されるならば、人間は次第に善良となるが故に、強壓の機關である國家の必要はなくなる。もしこの教義が正しければ、將來、如何なる國家又は政治經濟組織が望ましいかを研究することは無意味である。しかし私有財産の撤廢が如何にして理想社會を實現し得るか。生産の計畫化と所得の平等分配が行われたとしても、生長している社會においては、不安定、壓制グループ或は衝突を避けることはできない。生活水準がどんなに高められようとも、不満な人々が常に存在する。倫理上の問題も解決しなければならぬ。かくして社會問題を緩和するために種々の企てがなされねばならず、従つて何らかの政治組織が必要である。

次いで第二章「社會的生長の要件」において、生長の内容が明らかにされる。生長のための要件として資源、労働、知識と